

## 〔訳者解説〕 契約共同体 (Covenanted Community) としての教会

金丸 英子

カレン・E. スミスは以下の講演で「契約」という表現を多く用い、契約共同体としてのバプテスト教会を論じている。スミスによれば、初期イングランドのバプテストにとって教会は、そこに集う者たち自身の決意による任意の集合体ではなく、まずもって神に呼び集められた共同体 (gathered community) であった。神はこの群れに「人々を共に『集わしめ』、互いを契約の関係性へと呼び出された」(1 頁)。この契約は、神と人との間の契約であると同時に、人と人との間の契約でもあるという重層の特徴を備え、その内容は旧約聖書の十戒と新約聖書でイエス・キリストが「最も大切な戒め」として教えた命令とを反映している。神の愛に根拠を持つ戒めである。さらにスミスは、バプテスト教会の中心はこの契約の関係性にかかっているとまで述べている (1 頁)。

ただ、ここで留意すべきは、訳出された「契約」の英語は "covenant" で、雇用や賃貸などの関係内容を表わす "contract" のそれではないということである。つまり、どちらもラテン語に語源を持つが、前者は「来る (venire)」に「共に」を表わす "com" がついて、実存的有りようとしての「誓約」や「盟約」の意味合いを帯びる一方、後者は「共に」に「引き寄せる、引張る」の "traho" がついたもので、箇条的な内容合意による「契約、協定」を意味するものとなる。そして、「契約」と訳されている言葉は、聖書の場合もスミスの場合もいずれも前者の "covenant" のそれであって、神と人との間の、また人と人との間の誓約的性格にその特質がある。スミスの講演を的確に読み取るには、この点の前理解が重要になろう。

したがって、教会を契約共同体と言う場合、そこでの契約を後者の "contract" と取り違えると、教会が巷の企業や組織と変わらぬものになりかねない。社会生活での契約関係のように、個々の条件を満たすことが教会員に要求されるようになる。そして、それをチェックする細かな規則を整えることが教会の本務であるかのように捉えられてしまう危険性である。そこでは、以下の講演でスミスが述べるようなバプテストの教会理解が失われる。すなわち、神によって呼び出され、教会に集められた教会員。その教会員が愛において「互いを心に留め、『互いの重荷を負う』だけではなく、『霊的・肉体的な弱さも共に負う』ことを約束し」(2 頁)、神の前に共に歩み続ける。そのような信仰の群れとしての教会というバプテストの教会理解が、そこでは歪められてしまうからである。

ちなみに、契約共同体としての教会を以上のような意味合いで捉えることは自身の教会理解として欧米のバプテストの間では通説となっているので、論考として別途紹介する必要があるかもしれない。